

山鹿素行の「主静」批判

石橋 賢太

はじめに——問題の所在

山鹿素行（一六二二—一六八五）を「古学派」としてはじめて紹介したのは井上哲次郎である。^①これを受けて、以降の研究は素行を反朱子学の儒者とし、特に朱子学の実践性の欠落を批判したとする。^②その中で注目されたのが、素行による朱子学の人性論とそれにもなう修養論への批判である。これは、朱子学が人に善性が本来的に内在していると考え、その善性を引出すために自己の内面に沈潜する方法論を取ることに對して、素行が批判をしたとするものである。たとえば丸山眞男は、素行が朱子学人性論の「規範

性」と「自然性」との連続性を断切ったとし、尾藤正英は素行の思想において「道德の根源」は「人の心性とは無関係」に論じられているとする。^④周知のように近代的主体性確立の契機を古学に見るか、朱子学に見るかで対立のある丸山と尾藤だが、素行が朱子学の性善説に基づく人性論を批判したとする点では共通している。この見方はその後の研究にも受継がれ、^⑤もはや定説となっているといつて良い。^⑥しかし、先行研究を詳しく見ていくと、未だ不明確な部分があることに気づく。先行研究は素行が朱子学を批判したとするが、その具体的内容について曖昧さが残るのである。たとえば、中山広司は素行の朱子学批判の背景に「実学」の思想があるとしながら、「たゞし、いはゆる古学の

唱道は、朱子学の完全否定ではなく、その後も時に朱説を用ゐてゐる。その意味に於いて、素行は実学としての朱子学を、決して否定し去つたわけではない」ともいつている。さらにこれと異なる見方として、田原嗣郎は素行が朱子学を批判したのは、素行の朱子学に対する「誤解」によるとする。^⑧つまり、どの研究も「素行が朱子学を批判した」という大まかな方向では一致しているが、その矛先がどこに向かつていたかとなると、それぞれの研究で見解が分かれるのである。

これに対し、本稿では先行研究において十分に検討されていない問題があると考ええる。それは、素行の次のような考え方である。

愚謂へらく、六經四書の註解、古今に乏しからず。唯だ朱子は学を以て日用を論じ、下学して上達するの工夫あり。是れ其の意志の聖学に功ある所以なり。惜しい哉、先儒の餘流を汲むに因つて、猶ほ本然の善を尋ねて、天命の性に復らんと欲し、持敬存心の弊あり。^⑨

『山鹿語類』聖学三、雜子、儒家者流、「朱子」

先行研究は素行が朱子学の実践性のなさを批判したとするが、実際には素行は朱子の実践志向を高く評価している。そのうえで、朱子が人の本来的に有している善性（「本然の善」）を論じ、それに帰ることを説くのは、「先儒の餘流」

すなわち朱子以前からの儒者の影響だとしている。したがって、「本然の善」を想定する着想は朱子以前に現れたものであり、これを朱子その人に帰することはできないことになる。この点は先行研究で触れられることがほとんどなく、言及されるとしても結局は「本然の善」を求めた朱子の思想を素行が批判したとして、素行と朱子との比較に展開していくことが多い。^⑩だがこの言葉を見れば、素行が朱子と朱子以前の宋儒とを区別していることは明らかであり、先行研究の姿勢には疑問の余地が残る。素行の「朱子学批判」の内実について再検討することが必要であろう。

そこで、本稿ではこれまでと異なつた角度からの考察を試みたい。実は、素行の言葉を詳しく見てみると朱子よりも周濂溪を強く批判している。周濂溪は、素行が批判していた朱子に先行する儒者の一人であり、周濂溪批判の検討を通して、素行の思想形成についてより詳細な検討を加えたい。素行はいう。

宋に及びて周・程・張・邵の大儒相續いて起る。易に因つて太極を談じ、其の淵源を尽さんと欲するも、竟に高過の弊ありて日用と交渉せず。聖人の学、此に至りて大いに變じ、学者は工夫を立てて静坐を専らとし、天常人紀を輕易し、未発已発の中、寂然不動の話を挙げ、無極・太極・性善・養氣の句に参して、默識心通

を欲す。故に学者、覚えずして釈氏異端のみに陥り、顔の楽、点に与するの意を味ひ来る。道統の伝、宋に至りて悉く没没す。周・程・張・邵の儒を以て世に鳴るありて、其の間、数々講筵に侍するありと雖も、宋に漢唐の治なく、又恢復の謀なし。唯だ朱元晦の学先儒を圧す、然れども餘流を超出するを得ず。若し元晦をして周子の地に生れ、餘流の染なからしめば、必ずや不伝の統を承くべし。¹²〔山鹿語類〕聖学三、雜子、儒家者流、〔論道統説〕

素行は儒学が決定的に誤った方向に陥ったのは、宋代になってからだとしている。その誤りの中身である「未発已発の中」や「性善」の重視など、善性にかかわる概念は朱子以前にすでに用意されていたという。そして、宋代儒学の発端にいたるのが周濂溪なのである。だからこそ引用末尾において、素行は周濂溪と朱子とが入れ替っていればと惜しんでいるのである。

しかし、先行研究では周濂溪への批判に注目することがほとんどない。たとえば前田勉も「主静」の批判に注目するが、李侗から朱子への直截の影響を見るなど、素行が朱子と朱子以前の先学とを区別していることが考慮されていない。¹³

このような観点に立ち、本稿では素行が独自の思想を明

確化した『山鹿語類』における「主静」批判を検討する。「主静」とは、周濂溪の『太極図説』に由来する。¹⁴「主静」を取上げるのには、二つの理由がある。一つは、素行が「主静」について「塊然として物に交はらざるを以て本然の性と為し」¹⁵〔山鹿語類〕聖学一、致知、「弁或問格物致知説」といつているように、事物とかかわらない状態を本来のものとすることを。これは先行研究で問題とされてきた、人の本来性の考え方に「主静」が深く関連していることを意味する。

もう一つの理由は、「主静」において素行が周濂溪と朱子との齟齬を見ている点にある。素行は「主静の説は周子之れを始めて程・張・羅・李、皆静を好む。朱子、少しく静を必とするの失を論ず、而も猶ほ先儒の説に随ふ」¹⁶〔山鹿語類〕聖学一、致知、「弁或問格物致知説」と述べている。素行によると「主静」が受継がれ、その後の儒学の方向性を決定づけた。最終的には「主静」の説に飲み込まれてしまったが、それでも朱子はその流れに抗い「主静」が誤りであることを指摘しようとしたという。

これらを見ると、素行の「主静」に対する議論を見ることで、周濂溪への批判内容、及び周濂溪と朱子との関係に対する認識が見えてくると考えられる。また、それにより素行と朱子学との関係を考える手がかりも得られるだろう。

なお本稿では、素行の考え方をより明確に知るため、崎門派の儒者、佐藤直方（一六五〇―一七一九）との比較も最後に行く。¹⁷

一、素行による「主静」批判の内容

まずは、素行が「主静」をどのように批判しているのを見ていくこととする。

静寂にして思ふことなく為すことなきを求むるに非ず。天下の故来らざれば、感すべきなし、故に寂然として動かず。天下の故来るときは感ぜずといふことなし。若し静寂にして思為なきを提携する底は、是れ寂然不動に非ず、甚だ思慮作為するなり。無思なり無為なりと謂ふべからず。（『山鹿語類』聖学十一、大原、「弁或問主静説」）

素行が「主静」を批判する理由の一つは、作為性にある。

聖人が「寂然」としているのはただ思慮の対象となる事物が身辺に至っていないだけであつて、殊更「寂然」とすることを求めているわけではない。だから、「寂然不動」を求めることは作為ではないことになる。

これは、ただし儒教の教えとは本来の世界のあり方に従つて作られたものだという素行の考え方が背景にあるか

らである。素行は「聖人の教」について、「只だ日用事物の間に在りて、其の造作して力を用ふることを容さず、天地自然の誠に因つて」¹⁸（『山鹿語類』聖学一、致知、「論異端」と述べている。素行にとつて聖人の教えとは、彼らの創作によつて生み出されたものではない。聖人たちは、あくまで「天地」の本来のあり方に沿つて教えをなした。したがつて、周濂溪個人の作為に過ぎない「主静」は聖人の教えと背反する。

しかしそれでは、「主静」はどのように本来のあり方から外れているのか。すなわち、素行の考える本当の「静」のあり方とはどのようなものなのか。

一般に素行の世界観は動態的であるといわれることが多い。²⁰だが、「動には動の工夫あり、静には静の工夫あり」²¹（『山鹿語類』聖学一、致知、「弁或問格物致知説」ともいつており、決して「静」を捨てて「動」のみを取ることを主張しているのではない。

聖人の静寂を説くは、動感に対するのみ。静寂は動感の用なり。静と動と、互に交易して支離せず、陰陽相因るが如し。専ら静寂を主とするときは、恬淡を甘んじ虚無を主とするなり。²²（『山鹿語類』聖学十一、大原、

「論周子太極図説主静説」）

素行が強調しているのは、「動」と「静」とは一致の関係

にあるということにある。その世界観が動態的と見えるのもあくまで「静」に偏っていることへの批判からきているのであって、主眼が置かれているのは「動」「静」一致の關係であることを見落としてはならない。

しかし、『太極図説』の中に「動」と「静」とを明確に分けている言説はない。果たして素行は、どのように「動」「静」の分離がなされていると見ているのだろうか。

周子、太極の説を論じて動静を以て先後を定むるは、大原を論じて其の説を失ふなり。易に曰く、「日月、運行して、一たびは寒く一たびは暑し」と。一陰一陽、各々両儀を生ずるを以て之れを論ず。未だ嘗て其の先後を論ぜざるなり。〔山鹿語類〕聖学十一、大原、「弁或問理気妙合而人物生説」

周濂溪は、「動」「静」に前後關係をつけているという。これは恐らく、『太極図説』中の「太極動きて陽を生じ、動極まりて静なり。静にして陰を生じ、静極まりて復た動なり」⁽²⁴⁾のことを指していると思われる。素行は『太極図説』の当該箇所について、「周子は生を以て動と為す、故に動いて陽を生ず、動必ず極まるときは静なり、静にして陰を生ずといふ。是れ動は静に根ざし静は動に根ざして、更に間隔なきことを知らず」⁽²⁵⁾〔山鹿語類〕聖学十一、大原、「弁或問理気妙合而人物生説」といっている。素行によれば、周濂溪

は「動」が「静」になり、それがやがてまた「動」になると捉えている。このような「動」と「静」との關係性を段階とする考え方が、素行の目には両者を分離していると映るのである。

このように見れば、素行の「主静」批判の図式はかなり直線的であることが分かる。つまり、存在論として「動」「静」は一致している、だから「静」だけを取上げて「動」に先行するかのようにいうことは誤りである、これが素行の論理なのである。

以上が、素行の「主静」批判の要点である。これを踏まえて、次節では素行の周濂溪に対する認識、及び周濂溪と朱子との關係についての議論を見ていくこととする。

二、「主静」をめぐる周濂溪と朱子の齟齬

周濂溪の思想で後代にもっとも影響を与えたのは『太極図説』、就中冒頭の「無極而太極」であることは何人も異論のないところであろう。本節で課題とする、周濂溪と朱子との關係に対する素行の認識を知るうえで重要な意味を持つのが「無極而太極」の中央に位置する「而」の字の解釈である。『山鹿語類』には以下のような問答が記載されている。

或ひと問ふ、朱子曰く、「無極而太極の此の五字、一字を添減し得ず」又曰く、「此の而の字、輕し」と。

此の両説、差あるに似たり。

師曰く、聖人の道を説く、尤も皆緊要なり。更に文章を以てすべからず。故に學者、一字を増減せずして則るべし。朱子は周子の語を以て聖人の語と為す、故に一字を添減すべからざるに及ぶ。然れども「而」の字を見来れば、則ち太極の上、無極あるに似たり。故に人の差謬せんことを恐れて、「而」の字を輕しとす。

『山鹿語類』聖学十一、大原、「弁或問無極説」

素行によると、朱子は「而」を軽い意味しか持たない文字と見ようとしていたという。それは、「而」に重要な意味があるとしてしまうと、「無極」と「太極」とがそれぞれ別個のものとなるからである。朱子の意図は「無極」＝「太極」にある。⁽²⁷⁾したがって、両者を分節するかのような周濂溪の記述は朱子にとって好ましくないことになる。だが、周濂溪の文言に手を加えることができない朱子としては、解釈のレベルで自説を主張するしかなかった。この問答から、周濂溪の言葉に苦慮する朱子の姿を素行が想定していることが読取れる。

さらに、この「無極而太極」の解釈が「主静」においても重要となる。素行は「周子、静を主とするの説は、是れ

周子無極を以て主と為すの実意なり」⁽²⁸⁾『山鹿語類』聖学十一、大原、「論周子太極図説主静説」と述べている。これは、周濂溪が「無極」を起点とした生成論を作り上げたのは、「静」を「主」とすることをいうためだという意味である。

それでは、「無極」と「主静」とはどのような関係なのか。そして、「無極而太極」の解釈に苦慮した朱子は、その関係をどのように捉えたのか。これらに対する素行の解釈が見えるのが、次の問答である。

或ひと問ふ、「無極而太極」の「而」の字、輕きときは、無極太極同一なり。周子の説、如何。

師曰く、周子の「而」の字を下す、甚だ重し。太極は無極に因らざる時は出でざるの謂なり。先儒、皆「而」の字を輕ろんず。愚は今「而」の字を重んず。

各々後学の意見にして、周子の説、何の処に落在する、尤も憶計し難し。然れども先儒の謂ふ所は、後学の虚遠に陷溺せんことを恐るる故に、「而」の字を輕ろんず。是れ周子が言を変ずるなり。案ずるに、周子が無極を以て無形容の極と為し、是れを以て聖学の工夫と為す。是れ周子の学要なり。其の図説に「太極本無極」を以てするは、便ち太極の本来は無極に出づると為すなり。太極無極同一ならば、「本」の字を入れるべからず。「中正仁義を以てし、而して静を主として人

極を立つ」と。是れ静を以て無極と為すなり。通書に「静は無にして動は有」「一とは無欲なり。無欲なれば、静なるときは虚しくして動くときは直し」、「其の背に良まるとは、背は見ゆる所に非ず。静なるときは則ち止まる」等の言、皆静無を以て本と為す。明道の程子曰く、「昔、学を周茂叔に受く。毎に仲尼・顔子の楽処、楽とする所、何事ぞと尋しむ」又曰く、「周茂叔、窓前の草を除去せず。之れを問へば云ふ、自家の意志と一般」と。是れ意味なきの処を以て工夫と為す。張宗範の亭に名づけて養心と曰ふ。周子序説を作つて云はく、「予謂へらく、心を養ふは寡にして存するに止まらざるのみ。蓋し寡にして以て無に至る、無なるときは誠立ちて明通ず」と。又愛蓮説を作つて云はく、「予独り蓮の淤泥より出でて染まず、清漣に濯うて妖ならず、中通じ外直にして蔓らず枝あらず、香遠くして益々清く、亭々として淨く植ち遠く観るべくして、褻れ翫ぶべからざるを愛す」と。此の数言に因るときは、周子の学は唯だ無極の二字に在り。後儒、其の説の異端に近きことを厭ひ、「而」の字を軽ろんず。殆ど周子の意に非ず、却つて周子を病ましむるなり。⁽²⁹⁾（『山鹿語類』聖学十一、大原、「弁或問無極説」）

素行のいっていることを順に追つていこう。最初の論点

が「無極而太極」の「而」についてである。先に見た通り、朱子（先儒）はこの「而」について、大した意味のない文字だとしている。だが、素行はこのような朱子の解釈を周濂溪の言葉を改変したものと見ている。素行からすると、周濂溪は「而」に重要な意味を持たせることで、「無極」から「太極」が生まれるという関係を強調しようとしている。つまり、「無極而太極」とは、「無極」↓「太極」の段階的生成論を意味しているのである。『太極図説』の中に「太極本無極」（「太極は無極に本づく」という言葉があるのは、そのことを表している。したがって、朱子が「而」を軽いものとしようとしたのは、このような周濂溪の真意と背反することになる。

次いで素行は「主静」の部分に触れ、周濂溪の意思を「静」「無極」だとしている。『太極図説』に直截そのことが述べられているわけではないが、『通書』の「静は無」などの語にそれが表れているという。そして、素行はここから「無極而太極」に込められた周濂溪の真意を次のように読み解く。すなわち、「静」こそが「動」「静」の関係において根底となるということである。これが「無極」「根底」「無極」「静」なのだから、「静」「根底」という論理の展開になっていることは見易いだろう。

つまり、「無極」とは、存在論のレベルで「静」が「動」

よりも根底にあることを主張するために、「太極」のうえに設定されたものである。前節で見たように、素行は周濂溪が「動」「静」を段階として見ていると見ていたが、それは周濂溪が「静」を根底とした世界観を作ろうとしていたという認識が背景にあったのである。

なぜ周濂溪が「静」を根底としたのか。それは「周子の学、其の本づく所は虚静無欲を以てして、其の宗とする所は胸中の洒落に在り」⁽³⁰⁾（『山鹿語類』聖学三、雑子、儒家者流、「周子」といつているように、素行から見て周濂溪とは隠逸を志向する人物だったからである。だからこそ、素行は周濂溪がその志向を満たすための哲学を創出したと見ているのである。このことを裏打ちするように、「窓前の草」のエピソードや愛蓮説など、周濂溪は老荘と見紛うばかりのことをいつている。

それでは素行から見ても、朱子が「無極而太極」の解釈を改変しようとしたことにはどういう意味があるのか。それは当然、朱子が周濂溪の真意に気づいたことにほかならない。もし周濂溪の言葉をそのままにしておけば、隠逸を肯定する解釈を容認することになる。実際、朱子が「無極而太極」の解釈において、懸命に段階的生成論を否定するやりとりが『朱子文集』などに残されている。⁽³¹⁾素行の目に映る朱子とは、すぐれて社会的実践を志向する人物であった。

したがって、隠逸志向を容認できるはずがない。引用後半の「其の説の異端に近きことを厭ひ」とは、周濂溪の隠逸志向に朱子が抵抗を感じたことを意味している。そして朱子は、隠逸肯定の哲学的根拠となる「無極」↓「太極」の段階的生成論を否定して、「静」が根底であるとする解釈が起る余地をなくそうとした。それが、素行の理解なのである。

こう見ると、素行にとつて周濂溪と朱子とは決して同一の思想を持つてはいないことは明らかである。朱子も周濂溪の「静」偏重の考え方と戦ったのであり、素行からすると朱子はいわば自分とおなじ陣営に属している。従来、素行対朱子の図式で語られていたものが、「主静」の論から見ると、素行・朱子対周濂溪の構図になるのである。

そこで、次節では朱子の「主静」への認識について、素行がどう捉えていたのかを詳しく見ていく。これにより、従来見落とされていた素行と朱子との関係が明らかになるだろう。

三、「動」「静」の論から見える素行と朱子の関係

まずは、素行が朱子の「動」「静」の認識をどう見ていたのかを見てみよう。素行は両者の一致を強調していたが、

実はこの考え方は朱子と異なるものではないと素行は認識している。たとえば、『山鹿語類』には次のような引用がある。

朱子曰く、「動靜端なく陰陽始なし、先後を分つべからず。今只だ是れ起る処に就いて之れを言ふ。畢竟動の前は是れ靜、靜の前は又是れ動、何者を將てか先後と為さん。只だ今日の動便ち始たりとて昨日の靜は更に説かずと道ふべからず」(『山鹿語類』聖学十、天地、「弁或問天地説」)

これは『朱子語類』卷一からの引用である。素行は「動」と「靜」とを前後の關係と捉えることを否定していた。それは、朱子もおなじことなのである。朱子も「靜」を「動」に先行するものとはしていない。しかもこの問答が『山鹿語類』に引用されているということは、素行は朱子が「動」「靜」を一致の關係として認識していると理解しているのである。

それでは素行は朱子の「動」「靜」の認識を全面的に肯定しているのかというと、そうではない。一方では、「人動かざる能はずと雖も、人極を立つる者は必ず靜を主とす。惟だ靜を主とするときは、其の動に著はるるや節に中らずといふことなし」(『朱子文集』卷六十七「太極説」というなど朱子には「靜」を「主」とするかのような言説が存在す

るのも事実だからである。ここにおいて、素行は朱子の中に矛盾が存することを指摘する。

或ひと問ふ、周子の通書に曰く、「靜は無にして動は有」と。此の説、如何。

師曰く、或ひと問ふ、「心の本は是れ箇の動物なり、不審未発の前は全く是れ寂然として靜なり、還つて是れ靜中に動意あり」と。朱子曰く、「是れ靜中に動意あるにあらず。周子が謂ふところの靜は無にして動は有とは、是れ無にあらず、其の未だ形せざるを以て之れを無と謂ふ、動に因つて而る後に有なるに非ず。其の見るべきを以て之れを有と謂ふのみ。其の靜時に方りて動の理只だ在り(中略)」と。是れ朱子、説き得て好し。周子が靜無の説、大いに學者を過了。有無動靜、皆事物の用なり、其の本然なり。有無動靜を以て論ずべからず、只だ本然のみ。朱子は猶ほ靜を以て主と為す、故に「其の靜時に方りて動の理只だ在り」の語あり。(『山鹿語類』聖学十一、大原、「弁或問主靜説」)

素行は朱子の「動」「靜」を分離しない見方を評価し、周濂溪の「動」「靜」の誤った捉え方と対立的に論じている。それでも朱子も結局は「靜」を「主」とする考え方から自由にはなれてはいない。結果として、朱子の中には「動」「靜」について、ただししい認識と誤った認識とが並存して

いると素行には見えているのである。

しかしこれは裏を返すと、朱子の「動」「静」の認識から周濂溪の影響を除きさえすれば、ただしい「動」「静」の考え方に至ることになる。第一節で見た素行の「動」「静」に対する認識とはまさに、朱子の「動」「静」一致の面だけを取上げた考え方にほかならない。そもそも、素行ももとは朱子学者だった。したがって、より正確にいえば素行の「動」「静」に対する認識は朱子から学んだものだと考えるのが自然であろう。つまり、所謂「朱子学批判」に転じたあとであっても、「動」「静」の議論において素行は朱子の思想を受継ぎようとしていると解釈できるのである。観点を変えて考えてみよう。すでに見たように、素行から見て朱子は「静」に偏重することに抵抗しようとしていた。それでは「静」に対抗して、朱子が代わりに重視した概念とは何だったのか。それは「敬」である。朱子は、「敬」が「静」のみならず「動」まで貫く概念であることを強調することで「静」に偏ることを防止しようとしたといわれる⁽³⁴⁾。

来教に又謂ふ、静を言へば則ち虚無に溺れると、此れ固より当に深く慮るべき所なり。然れども此の二字、如し仏者の論なれば、則ち誠に此の患有り。若し天理を以て之れを觀れば、則ち動の静無き能はざるこ

と、猶ほ静の動無き能はざるがごときなり。静の養無き能はざること、猶ほ動の察せざるべからざるがごときなり。但だ一動一静、互に其の根を為し、敬義夾持し、間断の意を容れずんば、則ち静の字を下すと雖も、元死物に非ず、至静の中蓋し動の端有るを見得。(『朱子文集』卷三十二、「答張欽夫」)

これは張南軒とのあいだで交わされた書簡の文言である。「静」をいうことが老莊的な「虚無」の思想に陥ることを危惧する張南軒に対し、朱子は「動」「静」の両面にわたって「敬」を持つことが重要だと述べている。この回答において朱子が重視したのは、「動」と「静」とが分離しない点にある。そして、「動」「静」の一致を実現する鍵となっている概念こそ「敬」にほかならない。

この『朱子文集』の言葉が素行において重要な意義を持つのは、これが『修教要録』に引用されているからである⁽³⁵⁾。同書は程朱の思想に忠実たんとする姿勢で書かれている、朱子学時代の素行を代表する著作である。つまり、素行は朱子学を尊信していたころから「敬」を重視することで、「静」に偏らないよう努めた朱子の姿勢を知っていたのである。

そして、決して見落としてはならないのは、所謂「朱子学批判」に転じたあとの『山鹿語類』でも、このような朱

子の姿勢に対する認識には変化がない点にある。

師曰く、西山は、朱子が静敬両ながら存し用ふることを論じ、其の拠る所、尤も著明なり。朱子、主静の説を論じ来れば弊あるに似たるが故に、敬義夾持して間断すべからざるの意を以てす。³⁶〔山鹿語類〕聖学十一、大原、「弁或問主静説」

この引用は真西山の『西山読書記』の「以上の数条は、則ち又程子敬を主とするの説に本づくも、而も専ら静を主とせざるなり」(巻第十九)という言葉を受けてのものである。素行は、朱子が「敬」をより重視し、決して「静」だけを中心としていたわけではないという真西山の見解に対して賛同の意を示している。たしかにこれまでの研究でたびたび指摘されてきたように、素行は朱子学の「敬」を批判している。だが、「静」への偏重を防ぐための概念としての「敬」という理解は、所謂「朱子学批判」に転じたあとでも朱子学時代から一貫しているのである。こう見れば、素行が「主静」を批判したのは、朱子の「静」への抵抗に沿ったもののなのだということができよう。

したがって「動」「静」及び「敬」の議論を検討したいま、本節の課題であった素行と朱子との関係について、次のように結論づけることができる。すなわち、素行は朱子がもともと有していた考え方はそのまま受容し、朱子の言

説中の周濂溪に由来する考え方を排除していたのである。語弊を恐れずにいえば、「主静」批判において素行が目指したのは朱子の思想の「純化」なのである。

それでは、素行が「純化」しようとした朱子の考え方は何か。すなわち、周濂溪の影響を除いたとき、素行の目に映る朱子の思想とはどのようなものなのか。これを明らかにするために、ふたたび周濂溪批判の言葉を見てみよう。

後世の儒を学ぶもの、悉く虚遠に馳せ、切に高話を挙げ心を澄まし心を治め、或は存養の説を立て、或は黙識の静を為す。是れ聖学の沈淪し日用の缺虧する所以なり。³⁷〔山鹿語類〕聖学二、致知、為学、「学蔽」

この批判は、「学問の道は多言に在らず、但だ黙坐して心を澄まし、天理を体認す」という言葉を周濂溪のものとして引いたうえでなされている。³⁸この言葉を受けて、素行が「黙識の静」を批判していることは重要である。本稿冒頭で見たように、「主静」は事物とかかわらない状態を本来とするもののだから、沈思黙考の中で何らかの理解を得るといふ発想につながるだろう。それは「主静」が「静」↓「動」の順序を想定するものであるため、内面から外の事物へという考え方になる、素行はそれを批判しているのである。

ここで素行の歴史的な立ち位置を考えてみると、素行は

民を教導する役割として武士の存在意義を定義している。⁽³⁹⁾

第一節で触れたように、素行は聖人が「天地」のあり方に則つて教えを立てたとしていた。素行は学ぶ主体として武士を想定しており、⁽⁴⁰⁾ 武士は自己の主観に囚われることなく、「天地」に即した聖人の教えにしたがつて人々を導いていく。つまり、素行の理想は「天地」↓聖人↓武士↓民なのである。この上から下への整然とした秩序の中で、何者にも頼らず自力でたゞしい道徳を理解するという考え方はまったく不要である。それどころか、既存秩序をないがしろにする可能性もあるので、そういった考え方は排除する必要がある。つまり、素行の「主静」批判とは、戦鬪者として自己修養を基本とする一般的な武士道と一線を画する、彼の士道論の表れなのである。素行が「敬」を「静」よりも相対的に評価するのも、「敬」が「動」にも及ぶものである分だけ、完全に内面に閉じこもる「主静」よりは既存秩序を「天地」と同一化し強化する可能性があるからである。

これを踏まえて、素行が朱子を評価しているものを見よう。

或ひと曰く、人静なるときは乃ち事の用ふべきなし、如何なるか是れ静処閑居の学なる。

師曰く、(中略) 人に動静あり、視聴言動の用、飲食衣

服室宅用具の細、各々止むを得ざるの事あり、其の間是非を正し可否を審にし、其の天則を致せば、便ち精義、神に入るなり。故に聖人の学は、更に日用事物を離れず。若し日用に因らずして学を論ぜば、乃ち是れ異端なり。朱子の曰く、「学を為すの工夫は日用の外に在らず、身を檢すれば則ち動静語黙、家に居ては、則ち親に事へ長に事へ、理を窮めては、則ち書を読み義を講ず、大抵只だ一個の是非を分別して、彼を去り此れを取ることを要するのみ、他の玄妙を言ふべきなし」の語、尤も的当す。⁽⁴¹⁾ (『山鹿語類』聖学二、致知、為学、

「弁或問学説」)

素行は「静」のときの学問について問われ、日常生活のあらゆる場面に油断なく務めることを説いている。そのうえで、朱子の言葉を引用してその適切なことを評価しているすなわち、素行は朱子に外へと自己を開いていく姿勢を見ていたのである。内面に閉じこもることなく外部の事物と積極的にかかわっていく、その姿勢こそ既存秩序の肯定であり、武士の社会的な役割の考究に全力を注いだ素行の思想と合致するものだったといえよう。

しかし、周濂溪と朱子とを分離することにはそれ以上の含意はないのか。そこで次節ではこれまでと角度を変え、崎門派の儒者佐藤直方の「主静」の論との比較を行う。

四、佐藤直方との比較

佐藤直方は、師の山崎闇斎（二六一九～一六八二）譲りの厳格な朱子学者であり、「透徹した朱説への理解は我が国随一」⁽⁴²⁾ともいわれる。朱子学に終生忠実であり続けようとした、その姿勢は素行とは対照的である。しかも直方は「主静」を特に重視した人物でもある。素行の議論の輪郭を際立たせるには、格好の比較対象だといえよう。

直方の「主静」に対する考え方を知るために、「主静」をめぐる宋代思想史の認識から見てみよう。

聖学絶て後二周子ノ始テ主静ト云コトヲ説レ、程子コレニヨツテ敬・静坐ノ工夫ヲ教ヘラル、ナリ。（中略）
「中庸」ヲ表章シテ、道体ヲ詳ニシ、異端ヲ排キ、未
発ノ静、已発ノ動、存養省察ノ工夫、コ、ニ詳也。敬
ノ一字、聖門ニ有功テ先儒未発トコロ、朱子大ニ賞美
セラレシナリ。⁽⁴³⁾（敬説筆記）

直方を含め、ほとんどの朱子学者は周濂溪から朱子に至る宋代儒学史を一貫した授受関係のもとに理解している。直方の「主静」に対する認識も、周濂溪が提唱した「主静」の説に基いて程子が「敬」「静坐」を重視し、朱子もこれに賛同したとしている。朱子が「主静」の扱いに苦慮した

ことに注目し、朱子と周濂溪とのあいだに埋めがたい溝が横たわっているとした素行の認識との差は明らかである。

さらに注目すべきは、「主静」が直截「敬」の重視につながっているという見解にある。直方には、より端的に「敬ハ主静ノ工夫ト云」⁽⁴⁵⁾（静坐説筆記）という言葉もあり、明らかに「静」「敬」の図式となっている。だが、前節で見たように、朱子自身の意図としては「敬」を強調することで「静」に偏向することを阻止しようとしていた。むしろ、朱子が「静」よりも「敬」を重視しようとしたと見ていた素行の理解の方が朱子の意思に適っているといえよう。

こう見ると、実に奇妙な事態になっていることが分かる。一般に朱子学への批判者として扱われている素行の方が、朱子学の信奉者として知られる直方よりも、「静」と「敬」との理解においては朱子の真意を精確に読取っているのである。直方はいくまで一貫した思想としての朱子学に疑いを持つておらず、そのため朱子と周濂溪とを分離する発想も持ち得なかった。それが結果として、朱子の思想への不十分な理解につながっているのである。

それでは、朱子と周濂溪とを分離しない直方は「主静」の解釈に何らかの障碍を生じたのか。直方の論を見てみよう。

まず「動」と「静」との認識から見ていくと、直方も朱子及び素行とおなじく両者一致の関係を述べている。

動静無端カフシタ⁷⁶故、ドレガサキト云⁷⁷「モ後ト云⁷⁸」モナキゾ。朱子ニ或人天地ノ始ハイツゾト問タレバ、

今日則始ト云。此様ナ答ハ朱子デナケレバ得云ヌ⁷⁹也。

其様ナ⁸⁰「モ此処ノ合点ナクテハスマヌ⁸¹」也。⁸²〔太極図

同図説同図解並後論講義〕

直方もまた、「静」「動」には前後の關係はないとしている。ここに朱子の名が挙がっているように、「動」と「静」との存在論的理解において、直方は朱子をただしく踏襲しようとしているのである。

ところですでに見たように、素行は周濂溪の真意を「無極」と「太極」とを別々のものとしたうえで、根源である「無極」を「静」と結びつけて「静」の価値的優位をいうところにあるとしていた。それでは、直方は「無極」についてどう捉えているのだろうか。

このことで注目すべきは、直方の理解の仕方が一定していない点にある。『太極図説』の「無極而太極」の「太極」と『易』の「易有太極」とが、それぞれ「理」「氣」を合わせて説いたものなのか、「理」のみを説いたものなのか、が時期によって解釈が違うのである。これについて吉田健舟は「日頃から「定見」を持することの必要を強調して已

まなかつた直方にしては、甚だ珍しい揺れ方だと言つてよい」と述べている。⁸³「太極」と「理」「氣」との關係は本稿の課題から外れるのでこれ以上は立入らないが、「太極」をめぐる揺れの果てに直方が行き着いた解釈は本稿の課題と大いに關係する。それは、以下のようなものである。

無極太極ノ説ハ周子ノ本意ニアラス。通書ニテギンミスヘシ。本旨ハ太極動而云々ナリ。然レトモ孔子ノ易有太極ノ字イナヤウニナルユヘニ不得已云ヘリ。サテ老子之徒、異端ノ虚無ヲハ排ナリ。周子ハ有太極ヲ相手ニシテ有ニ対シテ無ナリ。徒無ハアシ、⁸⁴。〔道体講義〕

この言葉は直方の晩年（六十九歳）に発せられたものである。かつて（五十四歳）のときには「無極而太極ト始テ云ヒ出サレタソ、サテくメイヨナル發明ゾ」⁸⁵〔太極講義〕と「無極而太極」を非常に高く評価していたが、晩年になりこれは周濂溪が本当にいいたかったこと（「本意」）ではないとするに至っている。ここで直方が重要視している『通書』や『太極図説』の「太極動きて……」の箇所には、「無極」の語は一度も出てこない。もともと直方は、朱子に従つて「無極」と「太極」とを別箇のものとすることを否定しており、「而ノ字ハ次第ツク様ナ⁸⁶デハナシ」〔太極図同図説同図解並後論講義〕といっている。結局、朱子

の「無極」と「太極」とを合一とする論に依拠した直方は、周濂溪のいう「無極」の意味を説明し切れなくなり、「無極而太極」をあくまで方便に過ぎないとせざるを得なかったのだと考えられる。

ここからあらためて素行の所論を振り返ると、周濂溪と朱子とを分離して捉えることは、直方が直面した困難を回避するものであることが分かる。素行は「無極」と「静」とを結びつけようとする周濂溪の意図に気づき、「無極」を否定しなければ「動」「静」一致が崩れることを見抜いた。それに対し、直方はあくまで「無極」を尊重しつつ「動」

「静」一致の観念も保持し続けたので、相矛盾する二つの考え方のあいだで行き詰ってしまった。そのため、直方には「動静ト云内、静カ主ソ。動ノ為メニ静ナト云ハアリ。静ニセフ為メニ動ト云ハナイ」⁵⁰（「太極図同図説同図解並後論講義」）と「静」を優位とする言葉が残されている。「動」「静」は一致のはずなのに一方で「静」の優位をいう矛盾、まさに素行が朱子において指摘したこととおなじ事態が起っているのである。

無論、直方の揺れが「動」「静」の問題だけから起因しているとは見るべきではない。ただ、周濂溪から朱子までの一貫性を信じていた直方は、両者のあいだの齟齬、さらにはそれに由来する朱子学内の矛盾には気づかなかった。

素行はこの矛盾に気づき、周濂溪の影響を排除する必要性を感じ取ったのである。朱子学を完成した一枚岩の体系と見ることで陥る袋小路からの脱出こそが、素行の「朱子学批判」の思想の内実だといえるだろう。

おわりに

上記の考察を踏まえ、最後にあらためて素行と朱子学との関係について考えてみたい。

これまでの研究では、素行が朱子学を批判した点に注目が集まっていた。だが、素行が『近思録』を読み、朱子学に疑問を抱き始めるのは四十一歳のときである。三十代後半の数年間は素行の人生における「動揺期」といわれるが、それでも素行が四十過ぎまで完全には朱子学を捨てなかったのはなぜか、という観点はほとんどなかった。素行は若いころから兵学を学び、常に幕府に登用されることを望んでいた。素行の視線ははじめから統治する側を見ていたのである。その素行が中年になるまで朱子学をやめなかったのは、朱子学に抗いがたい魅力を感じていたからだといえないだろうか。その魅力とはこれまで見たように、朱子の現実社会を直視する眼差しであり、内面に閉じこもることなく自己を外に開いていく姿勢であろう。これは、統治

する立場として社会にかかわることを望んでいた素行の志向と合致するものである。だが実際に朱子学の教えを考えると、上手く現実とかみ合わない。それは既存秩序を守ることは、正反対の考え方が朱子学に紛れ込んでいるからである。それこそが周濂溪の隱逸志向であり、だから素行の目には排除しなくてはならないものとして映ったのではないか。そう考えれば、素行が所謂「朱子学批判」を主張したことも、それでも朱子を高く評価することも整合性がつく。⁽²⁾それは、政治とは距離を保ち続けた直方が、周濂溪と朱子とを分離しなかったことと対照的である。

ところで、朱子と周濂溪とを切離そうとするのは、素行独自の問題設定なのだろうか。おそらく、そうではないだろう。実際に直方も、自覚的でないにしろ、同様の壁にあたったといえる。また、素行とおなじく反朱子学に分類される伊藤仁斎も「無極而太極」について素行と似たような言葉がある。⁽³⁾仁斎は素行とは異なり生涯を市井で過ごしているが、それでも素行と同様の問題意識を持ったというのも考えerべき事柄である。本稿で提起した、朱子と周濂溪との関係は江戸儒学史を考えるうえでも意味のある問題であろう。

注

- (1) 『日本古学派之哲学』（富山房、一九〇二）。
- (2) たとえば松本純郎は素行が「朱子学の含む抽象的傾向を排撃し」たとする（『山鹿素行先生』至文堂、一九七三、一八一頁）。
- (3) 『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二）四六頁。
- (4) 「山鹿素行の思想的転回（上）」（『思想』五六〇号、岩波書店、一九七二）一七七頁。
- (5) 人性論に注目した研究としては、前田勉『近世日本の儒学と兵学』（ぺりかん社、一九九六）や佐久間正『徳川日本の思想形成と儒教』（ぺりかん社、二〇〇七）などがある。
- (6) 数少ない例外は田原嗣郎で、朱子学の「理」と素行の「誠」とがほぼ同様の意味であるとした。『徳川思想史研究』（未来社、一九五八）、「山鹿素行における思想の基本的構成」（『山鹿素行』日本思想大系三三、岩波書店、一九七三）参照。ただし、田原の見解は尾藤や前田らによって批判され、今のところ一般的に承認されてはいない。
- (7) 『山鹿素行の研究』（神道史学会、一九八八）八一頁。
- (8) 田原前掲書及び前掲文参照。
- (9) 広瀬豊編『山鹿素行全集 思想篇』（岩波書店、一九四一。以下、『全集』と略記）第九卷、二六六―二六七頁。

(10) たとえば、立花均『山鹿素行の思想』（ペリカン社、二〇〇七）二六頁。

(11) 垣内景子は「朱子学から最も自由な思想家としての朱熹」ということを提唱している（垣内景子『「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究』汲古書院、二〇〇五）。素行も同様の視点を持っていたといえよう。

(12) 『全集』第九卷、二七二―二七三頁。

(13) 前田前掲書、一六六頁。

(14) 本稿と関連する、『太極図説』の前半部をここに掲げる。「無極而太極。太極動而生陽、動極而靜、靜而生陰、靜極復動、一動一靜互為其根、分陰分陽兩儀立焉。陽變陰合而生水火木金土、五氣順布四時行焉。五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也。五行之生也各一其性、無極之真二五之精妙合而凝乾道成男坤道成女、二氣交感化生万物、萬物生生而變化無窮焉。惟人也得其秀而最靈、形既生矣、神發知矣、五性感動而善惡分、万事出矣。聖人定之以中正仁義而主靜、立人極焉」。

(15) 『全集』第九卷、五七頁。

(16) 同右。

(17) なお、本稿で明らかにしようとするのはあくまで素行の認識であって、中国哲学史上の事実を論じようとしているわけではないことをあらかじめお断りしておく。

(18) 『全集』第十卷、四一九頁。

(19) 『全集』第九卷、九三頁。

(20) たとえば、田原前掲文では次のようになっている。「この世界、素行のいわゆる「天地人物」の本性は「動」であり、それを形容する「生々息まず」「至誠無息」などの言葉は素行の著作の到る処にみられる」（四六一頁）。

(21) 『全集』第九卷、五七―五八頁。

(22) 『全集』第十卷、四一四―四一五頁。

(23) 同右、四〇五―四〇六頁。なお『易』の言葉は繫辭伝上第一章。

(24) 注(14)参照。

(25) 『全集』第十卷、四〇四頁。

(26) 同右、三九四―三九五頁。なお朱子の言葉はどちらも『朱子語類』巻第九十四。

(27) 「無極而太極」の解釈は、友枝龍太郎『朱子の思想形成』（春秋社、一九六九）一四六―二四六頁及び土田健次郎『道学の形成』（創文社、二〇〇二）一三一―一三四頁参照。

(28) 『全集』第十卷、四二二頁。

(29) 同右、三九六―三九七頁。なお『太極図説』の言葉は注(14)参照。『通書』の言葉はそれぞれ、誠下篇、聖学篇、蒙艮篇。程明道の言葉は『二程遺書』巻二上、同卷三。

(30) 『全集』第九卷、二四〇頁。

(31) 友枝前掲書参照。

(32) 『全集』第十卷、七七頁。

(33) 同右、四三二～四三三頁。なお朱子の問答は『朱子語類』卷六十二。

(34) 吾妻重二『朱子学の新研究』（汲古書院、二〇〇五）三九九～四一五頁参照。

(35) 『全集』第二卷、六二三頁。

(36) 『全集』第十卷、四二五～四二六頁。

(37) 『全集』第九卷、一二二頁。

(38) 実際には、この言葉は『宋史』道学伝の李侗のものである。

(39) 素行は士について「三民自らはれを師とし是れを貴んで、其の教にしたがひ其の本末を知るにたれり」（『山鹿語類』卷第二十一「士道」、『全集』第七卷、一一頁）としている。

(40) 「是れ亦天下の万民、各々なくんば不可有の人倫なりといへども、農工商は其の職業に暇あらざるを以て、常住相従つてその道を不得尽」（同右）。

(41) 『全集』第九卷、一二五頁。なお朱子の言葉は『朱子文集』卷五十八「答陳廉夫」。

(42) 友枝前掲書、一九〇頁。

(43) 「主静は直方の実践道徳論の根幹をなすと考えられる」（早川雅子「佐藤直方の主静説 講義・筆記にみえる近世語を手がかりとして」、『哲学・思想論叢』第十号、一九

九二、六五頁）。

(44) 『山崎闇斎学派』（日本思想大系三十一、岩波書店、一九八〇）一〇一頁。なお、「敬」や「静坐」は明道、伊川どちらともいうので、ここでの「程子」は二程をまとめて指していると思われる。

(45) 『増訂佐藤直方全集』第一卷（ぺりかん社、一九七九）四八一頁。

(46) 同右、四二九頁。

(47) 『佐藤直方 三宅尚斎』（叢書日本の思想家一二、明德出版社、一九九〇）八九頁。なお、直方の「理」「氣」論については、嚴錫仁「佐藤直方の理氣論―朱・陸の太極論争との関連において―」（『倫理学』第一四号、一九九七）、関幹雄「佐藤直方の理氣論をめぐって―太極解釈を中心にして―」（『九州中国学会報』第五十三号、二〇一五）参照。

(48) 『増訂佐藤直方全集』第二卷、四三五頁。

(49) 『増訂佐藤直方全集』第一卷、四六二頁。

(50) 同右、四三〇頁。

(51) 村岡典嗣『素行・宣長』（岩波書店、一九三八）四五頁。

(52) この意味では、朱子学時代から「実学」志向が素行学成立まで一貫していたとする佐久間正の見方は首肯できる（佐久間前掲書）。ただ、本稿の考察を踏まえると、一貫していたのは単に志向だけでなく、より深い思想内容を含ん

でいたのではないか。この点は、現在ほとんど顧みられることのない田原の説の再検討も含め、考え直す必要がある。

(53) 土田前掲書、一三三頁参照。

(中央大学非常勤講師)